被告の非人間性が更生可能性の評価に与える影響

○塚本早織^{1, 2}・唐沢穰¹

(¹名古屋大学大学院環境学研究科・²日本学術振興会)

キーワード：非人間化、更生可能性、量刑

The Effect of Dehumanizing Defendants on Perceived Rehabilitation Possibility

Saori TSUKAMOTO^{1,2} and Minoru KARASAWA¹

(¹Graduate School of Environmental Studies, Nagoya Univ., ²JSPS)

Key Words: Dehumanization, Rehabilitation, Sentence

目 的

人物像を説明する際に、人を人らしくさせている特徴が欠如している、つまり「非人間的である」と評価することがある (Dehumanization; Haslam, 2006)。人間らしい人物とは、思いやり、情緒、あたたかさ、などの高次元な特徴や感情を備えている人物であるとされる。Haslam は、これらの人間らしい特徴を Human Nature (HN) と総称した。HN が欠如している人物は、冷酷な、無感情な、事務的な、などの形容詞によって非人間化され、さらには機械やロボットのようにであると比喻される。そして、HN が欠如した「機械的な」人物ほど、反道徳的な行為を行った場合に更生する可能性が低く見積もられることが示されている (Bastian et al., 2011)。つまり、人間性の程度が更生可能性の評価と関連しているといえる。しかし、先行研究では、HN の高さや更生可能性の関係を媒介する要因を検討するに至っていない。さらに、刑事事件における更生可能性の検討は、減刑や執行猶予の判断において重要な要因となるが、被告の非人間性が更生可能性の判断に与える影響に関する実証的結論は未だみられない。非人間的な被告が、故意の傷害事件など比較的重度の反道徳的な行為を行った場合、更生可能性評価にどのような影響を与えるのか、また、非人間性は更生可能性評価に直接的な影響を与えるのかを検証するため、本研究では人間性特性とは異なる次元における被告人の印象が媒介する可能性を検討した。さらに、更生可能性の低さが実際の量刑判断の厳罰化と関連するのかを検証した。

方 法

【予備調査】人の特性を示す形容詞に基づき、行動記述文を作成した。それぞれの行動文を読み、「人間らしい」「機械的」だと感じる程度をそれぞれ回答するよう求めた ($N=20$)。HN の高 (人間的) 低 (機械的) に関する評定を基に、4 種類の行動文を選定し、人物像を示すシナリオを決定した。

【本実験】計 49 名の大学生を対象に、人物に関する印象を尋ねる実験であるとのカバーストーリーを与え、質問紙形式の実験に参加してもらった。参加者には、HN が高いあるいは低い人物に関する行動文を示し、十分にイメージを膨らませるよう描画作業を行わせた後、人物に関する印象を「非常に悪い」～「非常に良い」の 7 件法により回答するよう求めた。その後、実はその人物は刑事事件の被告である旨を伝え、職場の上司に対して傷害事件を起こしたというシナリオを呈示した。そして、更生可能性の判断、量刑判断を行うよう指示した。量刑判断は、「類似判例での量刑は 10 年」という基準を提示し、参加者自身が被告人に与えるに相当すると思う程度の量刑年数を自由に記入するよう求めた。

結 果

まず、人物のネガティブ評定に対する HN 操作の影響を検討したところ、HN が低い機械的な人物の方が人間的な人物よりもネガティブに評定された。次に、HN が高い人間的な

被告と、HN が低い機械的な被告における更生可能性の推測を比較した。HN が高い特徴を持つ人間的な被告の方が、HN が低い特徴を持つ機械的な被告よりも更生可能性が高く見積もられた ($t(47)=2.42, p<.05$)。つまり、被告の非人間性が更生可能性の推測に与える影響はネガティブ印象を介した間接的なものである可能性が示唆された。そのため、HN が更生可能性の評価に与える影響に、ネガティブな印象が媒介している可能性を検定した。印象を従属変数にした際の被告の人間性の操作の影響が有意であった ($\beta=-.44, p<.01$)。加えて、更生可能性の評価を従属変数に、HN の高低を独立変数とした単回帰分析を行ったところ、機械的な人格を持つ被告のほうが人間的な被告に比べて更生可能性が低く見積もられた ($\beta=.33, p<.05$)。この回帰モデルに被告のネガティブな印象を追加投入したところ、人間性の操作が更生可能性評価に与える影響は有意に減少し ($\beta=.19, n.s.$; Sobel's $Z=2.02, p<.05$)、ネガティブな印象が強いほど更生可能性を低く見積もるという効果は残るという結果が得られた ($\beta=-.37, p<.05$; 図 1 参照)。このことから、被告の人間性は更生可能性評価に直接の影響を与えるわけではなく、ネガティブな印象を受けるほど更生が不可能であると判断されていたといえる。加えて、更生可能性の低さは量刑判断を予測していたことから、更生が不可能であると評価されるほど厳罰が与えられることが示唆された ($\beta=.34, p<.05$)。

図 1. 人間性の評価 (HN) と更生可能性の関係における印象の媒介考察

以上の結果をまとめると、被告人の人物像が非人間的である場合、被告が与える印象がネガティブであるとの評価を媒介して更生可能性の推測に影響を与えることが明らかになった。しかしながら、本研究で検討したネガティブ印象は、事件の被告である旨を伝えられる前の評定であるため、実際の裁判員裁判における被告に感じる印象とは異なる。今後、事件の性質と被告に対する印象の交互作用の効果を精緻に検討することで、非人間的に評される人物に対する更生可能性や量刑に関する判断過程を解明する必要がある。さらに、非人間性認知や印象が、更生可能性や量刑判断に与える影響を応報的動機の観点から検討する必要があると考える。

引用文献

- Bastian, B., Laham, S. M., Wilson, S., Haslam, N., & Koval, P. (2011). Blaming, praising, and protecting our humanity. *BJSP*, 50, 469-483.
Haslam, N. (2006). Dehumanization: An integrative review. *PSPR*, 10, 252-264.